あたしがあいつであいつがあたし

柴犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あたしがあいつであいつがあたし

【Ｎコード】
Ｎ４４１０Ｏ

【作者名】
柴犬

【あらすじ】
あたしは斎藤里美、南ヶ丘小学校に転校生してきた早々、新しいクラスに幼稚園の頃一緒だった「斎藤一夫君」に出会ったの。あたしはひょんなことであたしと一夫君の体が入れ替わったの。あたしが男の子で一夫君が女の子、あたしが男の子になったことで変な感じなのもう嫌だわ。

第一話　転校（前書き）

この作品は映画「転校生」や小説「おれがあいつであいつがおれ」の里美、つまり女の子の立場で男女が入れ替わったのだ。男の子になった里美は男の子の現象にびっくり、死にたくなるばかりの毎日だった。

第一話　転校

あたしの名前は、斎藤里美、小学六年の女の子
あたしは斎藤里美というありふれた名前で長い髪がチャームポイント、明るく少々お転婆なの。
お父さんの仕事の都合で、幼稚園の頃に住んでいた家に戻る事ができたの、明日は南ヶ丘小学校に転校することになった。

里美の部屋
引っ越しが片付き、あたしはパジャマ姿で漫画を読んでいると、母が部屋に入ってきた。
「里美、明日新しい学校でしょう。早く寝なさい！」
「はあい」
（ちょっと、おしっこがしたくなった）
寝る前に用を足しにトイレに…
ジャー　カチャッ！
顔を赤らめながら
（ふぅっ！）

（明日は、新しい学校か…）
南ヶ丘小学校の始業式

あたしは、転校生らしく白の丸襟ブラウスに紺色のプリーツの吊りスカートを穿いて、担任の先生の後について６年２組の教室の前に立った。
ガラッ！
「起立！　礼！　着席！」
「みなさん！　これから新しいクラスの仲間を紹介します、入って来なさい！」

先生が黒板に「斎藤里美」と書いた。
「今日から、このクラスになる斎藤里美さんです。お父さんの仕事でこの地に戻る事になりました…」
里美が教室を見渡していると見覚えのある男の子の顔が座っている。
（ちょっとしたら、ひまわり幼稚園の斎藤一夫君？）
クラスの男子が
「一夫！　お前のいとこじゃねえのかよ？」
「違うよ」
（間違いないわ、一夫君、斎藤一夫君だわ）

「一夫君…　斎藤一夫君ね、ひまわり幼稚園の時一緒だった、斎藤一夫君、やっぱりそうだわ」
一夫が顔を赤らめて否定して
「違うってば、違う」
「一夫君！　君の彼女でしょ、白状しなさい」
クラスの男子達が一夫をからかい始めた。
「はい、静かに斎藤さん人違いってあるかも知れないかも、クラスのみんなも仲良くするように」
「そうよ、転校生には仲良くするよう斎藤一夫君！」
ゲラゲラ　ゲラゲラ

下校時間
「一夫君、一緒に帰ろ！」
「やだよ、何で一緒に帰るだよ、お前のお陰で恥かいただよ」
「だって、幼なじみだもん」
一夫がいきなり、あたしのスカートをめくった。あたしの紺色ブルマが丸見えになった。
「あたし、パンティの上にブルマ穿いてるもんね、あたしのパンティ穿きたいの？　それともブルマ穿きたいでしょ」
スカートを捲ってブルマを脱ごうしたら

「お前、里美やめろよな」
「だったら、あたしん家遊びこない、幼稚園の頃のままだよ」
ダダダァッ
一夫は一目散に走った。
「一夫君！　待ってよ」
あたしは、一夫君を追いかけが見失った。
あたしがたどり着いのは小高い丘の神社だった。
「まあっ、いいか」
あたしは石段の上に立っていた。
（街も幼稚園の頃と変わってないわ）
その時、誰かが強くあたしを背中から突き飛ばした感じがした。びっくりして
「きゃあああっ！」
あたしは足を踏み外し、目の前が真っ暗になった。一瞬、あたしは何が何だかわらなくった。

第二話　あたしに変なモノが…

神社の石段の下まで転げ落ちた二人はその場で気を失っている。
あたしは目が醒め気が付いた。何もなかったように石段を登っていき、あたしの家に帰ることに
里美は薄手のスポーツシャツにジーンズ半ズボンを穿いていたのだ。
この時、一夫の体になっていた。内股で歩き、「斎藤」という表札の門をくぐり、里美の家へ帰ってきた。

ガラガラ

あたしは玄関を上がり、あたしの部屋に
「里美、帰ったの？　ただいまぐらい言いなさい！」
ダイニングから母の声が
あたしは部屋のドアを開け、整理タンスからトレーナーとジーンズを出し着替えようと、ブラウスのボタンがない
「変だわ？」
鏡台の鏡を見て、スポーツシャツを捲り上げると、なんとブラジャーではなくランニングシャツを着ていたのだ。
「ななんで、あたしが男の子の下着なんか着てるのよ？」
恐る恐るランニングシャツを捲り上げると、胸がぺったんこだった。
「きゃあ！　ああたしの胸がななない、あたしのおっぱいが無くってわ…」
（まさか…）
里美はジーンズの半ズボンの中に手を恐る恐る入れてブリーフの中を触ると
「きゃあああっ！　そんなバカな…　あたしに変なモノがついてるわ　うっうううああああん　うあああん」

騒ぎを聞いて母があたしの部屋に入って来た。
「どうしたの？　里美　ささあ…　あなた誰なの？」
男の子になった里美は、気持ちの悪い泣き声で
「ママ、ママ、あたし里美、あたし変なの変なの、おっぱいが無くなったの、股に変なモノがあるのよ…　うわあああああん　うわあああああぁん…」
「まあっ！　男の子が真っ昼間から女の子の部屋に忍びこんで…出ていってちょうだい！　さもないと警察呼びますからね」
「ママ　ママ、里美よ　里美あたしよ　ママ信じてよ！」
「とぼけないで出ていってちょうだい」
「うわあああああぁん　うあああん」
一夫になった里美は母親に玄関まで追い出される所
ガラガラガラッツ！
白の丸襟ブラウスに紺色プリーツスカートの女の子が玄関に入って来た。

第三話　あたしになったあいつ

「うわあああぁぁん　うわあああぁぁん　アタシよ！　里美よ　里美　うわあああぁぁん」
あたしは泣きながらママに訴えたったがママは信じて貰えなかった。

ガラガラガラッッ！
玄関には、朝着て行った、白の丸襟ブラウスに紺色のプリーツスカートの女の子つまり、もう一人のあたしがいた。
「泣くじゃねえ　みっともない！」
あたしがまるで男言葉で喋っているみたいだ。
（アタシが一夫ちゃんに？）
あたしは思わず
「アタシだわ！　アタシ！　里美よ　里美　里美」
あたしになった一夫君に触りまくった。
「触るな、気持ち悪い」
あたしは一夫君に突き飛ばされて、思わず悲しくなり
「うっううう　うわあああぁぁん　うわあああぁぁん！」

泣いてしまった。
ママが一夫君に
「里美！　乱暴はおよしなさい！」

一夫君は
「おばさん、こんにちは！　今日クラスに転校生してきた斎藤里美さんの幼なじみの斎藤一夫です。おばさん幼稚園の頃から変わってないなあ、それに比べうちのおふくろは…」
バシッ！！
ママがあたしになった一夫ちゃんをぶった。

「ふざけるのもいい加減にしなさい！」
あたしは何が何だか悲しくなり、
「うわあああぁぁん　うわあああぁぁん」

玄関を飛び出した。
「待てよ、里美！」
一夫ちゃんの声
「うっうううう　うっうううう」
泣きながら走った。
一夫君が追い付き
「里美！」
思わず一夫君の胸に顔を埋めて
「うっうううう　うっうううううあああん　うわあああぁぁん…」
「泣くなよ！　里美！　俺まで悲しくなるじゃん」
「一夫君！　あたしどうしたらいいの？」
男の子になった不安でたまらなくなった。
「どうしたもこうしたもない、お前は俺ん家へ俺はお前んちで暮らすしかない」
いくら幼なじみでも男の子の家に暮らす不安でいっぱいになった。
「グズン　うっうううう」
「泣くなよ！　俺が俺ん家に送っていくから後ろに乗れ！」
一夫君の自転車の後ろにすわり、アタシは思わず一夫君つまりアタシの胸に手をあてた。
「痛っつう！」
「さっき、胸を揉みほぐしたらヒリヒリして」
あたしはあたしの胸をいじくりまわされて頭に来て、一夫の背中をバシッと叩いた。
「まあっ！　一夫のバカ！　あたしの胸さわったのね　バカバカ！
一夫のエッチ！　スケベ！　変態！」
ブラウスからブラジャーのラインが透けて見える背中を何回もバシ

ッバシッ叩いた。

第四話　一夫君の家

あたしの胸をいじくりまわされて一夫君の背中を叩くあたし
「里美、痛てえなあ！　静かに乗れよ」
「何よ、エッチ！　アタシの胸さわっておいて！」
「そういうなら、俺のポコチン返せよ！」
「ふん、あんた何かもん要らないわよ！」
自転車で二人が言い合っている間に一夫の団地に着いた。
「ここが、俺ん家だ！」
南ヶ丘市営団地の７棟の三階の３０４号室が斎藤一夫の家だ。自転車を降りて二人とも階段を上がり、３０４「斎藤」の書いてある錆付いたドアを開けると一夫君のママが鬼の形相で立っている。
「一夫！　どこほっつき歩いての？　早く入りなさい！」
あたしは悲しくなり
「グズン　うっっっっっ　うっっっっっ」
「一夫！　どうしたの？」
一夫君が
「違うだ！　おふくろよく見てろよ、俺は斎藤一夫であいつが今日、転校してきた斎藤里美！」
「里美さんね、ふざけてないで早く家へ帰りなさい！」
（あたしのお家、あたしのお家へ帰りたいの…）
一夫になった里美の瞳から大粒の涙が
「グズン　うわあああああぁぁん　うわあああああぁぁん」
「一夫、どうしたの？　早く入りなさい」
「うわあああああぁぁん　うわあああああぁぁん」
「変な子だね」
ガチャン
ドアを閉め、泣きながら一夫君に家に入った。
「一夫、いつまでも泣かないの！　男の子でしょ！」

「グズンッ　うっううう　うっううう」
「自分の部屋で涙拭いて」
あたしは一夫君の部屋に
部屋の襖を開けると
「なにこれ？　やだ男臭いわ！もう汚いわ」
一夫の部屋はコーラの缶やお菓子の袋が散らかり、もうゴミ一面であった。
（あたし、ここで寝るの？）
部屋のゴミを片付けた。あたしは急におしっこがしたくなった。半ズボンの前を押さえトイレに飛び込み、ジーンズの半ズボンとブリーフを下ろし便器を跨ぎしゃがんだ。
ジャージョボジョボ
ニョロニョロ　ジャー
（嫌だ、何よこれ！　ヘビみたいで気持ち悪い！）
里美の小便口は先っぽが定まらないホースみたいに便器の中で暴れてあっちこっち小便を滴れてる。
里美は顔が真っ赤になった。暴れるホースを押さえるとカチンカチンなり、
「痛いっう！」
小便を出し切り
カランカラン
里美は顔を赤らめながら紙でホースの先っぽを拭いたら、さらにホースがカチンカチンになった。
（もういやだ、ホース切ってほしいわ）
ブリーフを上げジーンズの半ズボンのチャックを閉めるとカチンカチンのホースがチャックに挟まり
「きやあっ！　痛いっ！」
里美を股を押さえた。
一夫君、つまりアタシん家電話した。
ピッピッ…　プルルルル　プルルルル　プルルルル

ガチャン！
「もしもし！」
「あっ！　一夫君なの？　アタシ、アタシ里美よ」
小さな声で
「なんだよ里美かよ！」
「こっちうまくってる？」
「ああ、うまくってるよ」
「おまえな、そのオカマ言葉やめろよな」
「わかったわ！　そっちも女の子らしくしてよ、あっ！思い出したけど、あれって形が変わるのね」
里美は赤面しながら
「あれって…」
「おしっこの出るところよ、だっておしっこした後紙で拭いたら形が変わって…」
「バカ！　そんなもん紙で拭くなよ。数回振り回ししまえばいいんだ」
（だって、そんな事言って恥ずかしいわ）
「わかったわ、あなたも紙使ってちょうだい」

「一夫、ご飯よ」
「はあい！」

座敷の居間にテーブルを囲み一夫君の父と母、あたしあたしが正座してうなだれている。
「一夫、元気がないぞ」
一夫君の父がビールをゴクリと飲んでいる。
「いえ、今日引っ越してきた斎藤里美さんせいですよ」
「斎藤里美か、あってみたいのう」
「ごちそうさま！」
「もう、食べないの？」

一夫のどんぶり茶碗にご飯半分残して
「いらないわ、もう寝るわ」
「一夫、パジャマに着替えて寝るのよ」
「おやすみなさい」

一夫の部屋
里美は押し入れから一夫の蒲団を敷いて、整理タンスから青い色のパジャマを出した。上着をきてパジャマのズボンを後ろ前逆に穿いた。布団に潜りこみ、なかなか寝付けなかった。
（一夫君、どうしているのかな？）

第五話　朝

チュンチュン　チュンチュン
スウー　スウー
一夫の家で一晩過ごした一夫になった里美は、一夫の布団に包まって寝ている。里美のパジャマのズボンにはテントのように盛り上がっている。
ふぁあーあ
（よく寝たわ！）
ベッドではなく一夫の蒲団だった。
「あっ！　ここはどこなの？　アタシん家じゃないわ」
布団をめくってあたしの股の所をみるとパジャマのズボンが盛り上がっていた。「きゃあああっ！　何なのここれ…？」
里美は男の子になって初めて「朝立ち」という男子特有の生理を経験したのだ。
ピックン！　ピンピン
里美はテントのてっぺんを触ると
「痛いん！」
（やだもう！　恥ずかしくってお嫁に行けないわ）
トイレに駆け込み小便するとまだアソコはピンピン立って硬くなっておしっこがうまくできなかった。
（おしっこ、外に出ちゃう）
里美はムスコを指先ではじくと
「痛いっう！」
紙で拭いたらムスコはますますピンピンしてしまう。部屋に戻り、一夫の整理タンスからランニングシャツとブリーフに着替え、長袖ポロシャツに昨日穿いてたジーンズの半ズボンを穿き、朝ごはんをそこそこして黒のランドセルを背負ってあたしの手提げバックを持って急いで一夫君のいるあたしん家へ向かった。

第六話　あたしの部屋

あたしは早く一夫君の家を出て学校に行く前にあたしん家に寄ることにした。
（一夫君たっら、ちゃん朝やってるかしら？）
考えてるうちにあたしん家に、門の中に入り裏のあたしの部屋の窓の所にたどり着いた。窓にはピンクのカーテンが閉まったままだった。
（一夫君、まだ寝ているのかしら？）
あたしはコンコンと窓を叩き、カーテンが開いたらおっぱい丸出しでパンティ姿の一夫君が窓を開けた。
（まあっ！　一夫君服ぐらい着てよね）
「あたしよ！　里美！　里美」
小声で言うと、さらに
「あなたのバック持ってきたわ」
あたしの花柄の手提げバックを机に置いた。
「サンキュー！　中に入れよ！」
あたしは靴を脱ぎ窓からあたしの部屋に入った。
部屋に入ると起きたばかりでベッドがぐちゃぐちゃになっていた。
一夫君が長袖のスクールブラウスを着ようとする
（まあっ！　そのまま着て、おっぱいが見えちゃうじゃない）
「ちょっと！　そのままブラウス着て、丸見えじゃないのブラジャー着けてよ、ブラは鏡台の下の引き出しにあるわ」
一夫は鏡台の引き出しからブラジャーを出そうとしたらピンクの花柄のポーチが飛び出してきた。一夫がそのポーチを拾い上げ
「何だこれ？」
あたしは顔が真っ赤になり思わず、一夫の頬っぺたを引っ張叩いた。
バシッ！
「一夫のバカ！　あんたには関係ないでしょ！　早くブラつけてよ」

生理用品の入ったポーチを引き出しの奥にしまった。一夫はブラジャーの着け方がわからずブラを持ったままだった。
「ブラジャー、どうやって着けるだよ」
「あたしが着けてあげるから着け方ぐらい覚えてよ」
一夫は両腕を前に出しブラの肩の両紐を両腕に通し、背中のホックを留めて、バストを整えてあげると
「痛えなあ、やさしくしろよなあ」
「ぜいたく言わないの」
ガチャン！
「里美、起きたの？　あっあなたっていう人は、朝から女の子の部屋に忍びこんで、里美！　朝から男の子を部屋に入れて、早く支度しない」
ママが部屋に入ってきた。（あっ！　あたしよ！　ママったら）
悲しくなり
「ううっ…　うわあああああぁん　うわあああああぁ～」
「里美、いい加減しねえかバカヤロウ！」
あたしの頬っぺたに一夫の拳が飛んできた。あたしのベッドに倒れた。
あたしは布団に顔を埋め
「うわあああああぁ～ん　うわあああああぁん」
泣きじゃくった。
あたしは思わず
「あたし、死んじゃいたいわ！」
「ばか！　お前が死んだら俺どうなるんだよ」
「じゃあ！　あたしの体、大事にしてよね！　パンティ穿き替えたの？　毎日パンティ穿き替えてよね。髪ちゃんといてね、長い髪がボサボサじゃない」
一夫は鏡台の下着の入った引き出しから花柄パンティを出しパンティを穿き替えた。
「ブルマ穿いたの？　ブルマぐらい穿いてよね」

一夫は紺色ブルマをパンティの上から穿いた。チェックのスカートを穿き、ブレザーを着て
コンコン　コンコン
「里美、着替えたの？」
「おい、お前のママが来るぞ早く出ろ！」
「あたし、近くの広場で待ってるから」
あたしは窓から外に出た。

第七話　登校

（一夫君たっら、遅いわね）
里美の家の近くの公園で長袖のポロシャツにジーンズの半ズボンで黒のランドセル背負って立っている里美はイライラして一夫が来るのを待っている。すると、（あっ！　やっと来たわ）
長い髪にブレザーと赤いチェックのスカートに赤いランドセル背負って走って来た。
「遅かったじゃないの」
「ごめん　ごめん！　朝飯の支度をさせらた上に説教だよまったく…」
「ごめんなさい！」
「何、謝ってるだよ？」
「あたしのせいで…　ぐずんううっうううっ」
「お前、泣くなよ！　男がメソメソするんじゃないよ、男というのは人前で泣かないものだ」
「だって、あたしって元々女の子じゃないの？　あんただって人前で乱暴な言葉使ってるじゃない、斎藤里美って女の子は御淑やかな女の子よ」
「…」
「そういえば、朝あたしの体が変なの」
「何だよ」
里美は顔を赤らめてもじもじしながら
「あのね、…言っていいかしら…」
「何だよ、言ってみろよ」
「あたしね、朝起きたら、パジャマのズボンの所がピンと立っての、おしっこの出る所を指で弾いたら痛くて…」
「バカ！　こんな所触るなよ、それはな男の子が健康な証拠だ！小便だしたら治るから心配するな」

「だったら、あなたも女の子の健康な証拠、月に一度はアレっていうものが…」
「月に一度って何それ？」
顔が真っ赤になりもじもじしながら
「それは言えない…」

突然、クラスの野口という男子が一夫のチェックのスカートを捲ったのだ。スカートの中の紺色ブルマが丸見えになったので野口は
「チェッ、何だブルマかつまんねえ！」
一夫は頭に来て
「貴様あ！　何がブルマか！　このスケベ野郎が！」
一夫は走って野口を追いかけ回した。南ヶ丘小学校の校門を抜け、運動場へ
あたしは一夫君と野口君の後を追い掛けた。
一夫は野口を砂場まで追い詰めた。
「貴様あ！」
砂場で一夫と野口が取っ組み合いの喧嘩を始めた。
周りは野次馬で一杯になった。
あたしは
「もう、やめてよ一夫君」
担任の大場先生が来て
「二人とも、やめなさい！」
二人を引き離そうとしても止めなかった。
「やめなさい！　こらっ！」
二人やっと立ち上がった。一夫のブレザーとチェックのスカートが泥だらけになった。
（あたしの洋服が…）

第八話　体育

「やめなさい！　もおっ！　二人とも職員室に来なさい！」
（もおっ！　一夫君たっらあたしの服、泥だらけにして…）

職員室
一夫と野口が傷だらけの顔でシュンとしている。
大場先生が
「あたし、先生やって初めてだわ、男の子と女の子が取っ組み合いの喧嘩するなんて」
野口が
「だって！　ふざけ半分で斎藤のスカートを捲ったら、斎藤がいきなり怒りやがって…」
「野口君ね、いくらおとなしい女の子でもスカート捲られたら誰だって怒るわよ。この年頃の女の子はデリケートなんだから」
「斎藤さん、あなたがそんな女の子とは思わなかったわ、スカート捲られて怒るのは先生、わかるわ。あたしも女ですもの。でもね、男の子みたいにあんな取っ組み合いの喧嘩して、可愛い服汚して顔は傷だらけで女の子として先生、恥ずかしいわ！」
二人とも顔をうつむいたままシュンとなった。
「いいわ！　二度と喧嘩しないこと！　野口君、斎藤さんに謝りなさい」
「斎藤、ごめんな」
「斎藤さんも謝りなさい」
「野口君、ごめんなさい」
「二人とも握手して」
一夫と野口が握手して
「よし！　もういいわ二人とも教室に帰って！」
「あっ、斎藤さんは保健室行って汚れた服洗濯してもらいなさい。

乾くまで体操服で過ごしなさい。顔の傷も手当てしていいね」
保健室
教室の廊下にある「斎藤里美」の黄色体操服袋を持って保健室に来た一夫
養護の先生が
「あらあら、女の子がお洋服が泥だらけで、斎藤里美さんね大場先生から聞いたわ。さあ体操服に着替えなさい」
保健室のベッドのカーテンを閉めて一夫は里美の体操服に着替え始めた。
「汚れた服はかごに入れてね」
上半身裸にブルマ姿になった一夫、里美の丸首袖口のエンジ色の白の半袖体操服を着てベッドのカーテンを開け、傷の手当てをしてもらい教室に帰った。
ガラッ！
顔に絆創膏だらけの一夫を教室に入ると
「斎藤里美さん、席につきなさい」
女子の体操服姿の一夫が席についた。
（まあっ！　一夫たっらあたしの顔を傷だらけにして、許さないわ）
隣の席の一夫に小声で
「一夫君、あたしの顔を傷だらけにしてもおっ！」
「仕方ないだろう！」
大場先生が
「はい、朝のホームルームは終わります。一時間目は体育です。体操服に着替えて体育館に集合！」
男子は、ここの教室で女子は、職員室隣の女子更衣室でそれぞれ着替えることに
（やだ！　あたし男子と一緒に着替えるの？）
廊下にある「斎藤一夫」と書いた黄色体操服袋を取って自分の机の上に袋から白の「南ヶ丘小学校」の校章の入ったランニングシャツ

と白い短パンを出した。
（やだわ！　男子のランニングシャツじゃないの胸が見えちゃうじゃない…）
里美はポロシャツシャツを脱ぎ下着のランニングシャツを脱いだ。
上半身裸になり胸を隠しながら、体育用のランニングシャツを着ようとしたら体操服の汗臭さが里美の鼻をついた。
（一夫たっら、体操服ぐらい洗濯してよね）
ジーンズの半ズボンを脱ぐのにもじもじしていた。それを見た男子が
「斎藤！　何しているだよ早く脱げよ」
上半身裸の男子がランニングシャツを着ながら言った。あたしは思わず
「きゃあああっ！」
叫んだ
ズボンを脱いで短パンに穿き替えた。顔がもう真っ赤になって教室を出た。ランニングシャツの胸の所を両腕で隠して用を足しに赤いスカートのマークの女子便所に入ったら
「きゃあああっ！　痴漢！」
半袖体操服姿の女子から追い出された。
あたしは男子トイレに恐る恐る入ると男子数人が立ち小便して
「きゃあっ！」
顔を背けて個室に入って用を足した。

体育館
すでにランニングシャツ姿の男子と半袖クールネックの体操服姿女子が集まっていた。
女子数人が里美に
「斎藤君！　女子便所に入らないでね、この変態がべェー」
あたしは悲しくなり
「ううっ　ぐずん」
「里美、またメソメソして何かあったのか？」

女子の体操服にブルマ姿の一夫が
「一夫君〜」
「泣くなよ、後で話聞くからよう」
「整列！」
ジャージ姿の大場先生が体育館に響くような大きな声で号令を掛けた。
男女別に整列し、ラジオ体操からストレッチまで号令に合わせ準備運動
「集合！」
「今日は、ドッチボールをやります。男女に別れて突き指をしないように」
男子のコートでは里美の集中攻撃で
バチッ！
「きゃあ！　恐い〜」
「一夫！　捕れよ！　何やってるんだよ！」
男子のブーイングの嵐

一方、女子のコートでは
「おりゃあ〜」
バチッ！
「きゃあ！」
顔に絆創膏だらけの一夫がバッタバッタとボールを当てコートの中はたった一人になった。
「里美！　それっ！」
ボールを一夫にパスし、逃げ回る相手に一撃を加えた
「おりゃあ〜！」
ビューン　バチンッ！
一夫のボールの勢いが強く相手はボールを落とした。
「ゲーム終了！」
「斎藤さん、やるね」

「里美！　凄いじゃん」
里美とは対称的に一夫はクラスの女子の人気者になった。
「集合！」
大場先生が
「クラスのドッチボール選手を決めます。まず男子から…　女子は斎藤里美さん、佐藤美紀さん、…」
（一夫君、すごいクラスの代表になるなんて、あたしなんか男子の足引っ張ってばかりで…グズン）

第九話　集団宿泊訓練

南ヶ丘小学校では五月の連休後に最上級生である小学六年生は山奥にある青年の家で「集団宿泊訓練」が行われる。その目的は小学六年生としてのリーダーを養い、中学校進学への心構えを植付けるのである。真の目的はゴールデンウィーク明けの「五月病」の一掃である。連休明けになると必ずクラスの中に一人か二人は学校に行きたがらないヤツが出てくるのだ。学校としては「集団宿泊訓練」でクラスの団結力を強化する事で登校拒否を防ぎたいのであるが…

6年2組の教室

ゴールデンウィーク明けでクラスの何人かは「連休ボケ」にかかっている。

大場先生が

「連休の後ボケッとしている子がいますが、そこで来週は二泊三日の集団宿泊訓練があります。山奥の青年の家で六年生全員泊まりながら勉強やスポーツで連休ボケを一掃します。持ってくる物は冬の体操服上下と替えの下着数枚、それと…」

里美の家

あたしは一夫君の家、つまりあたしの家に行った。門の所であたしのママにバッタリ会ってしまった。

「斎藤君！　里美に付きまとってしつこいじゃないの？」捨て台詞を残しながら買い物に出掛けた。あたしは玄関を上がり、あたしの部屋に入ったら、一夫君が風邪をひいてあたしのベッドで寝込んでいた。

コホン　コホン！

「一夫君！　大丈夫？」

ピンクのネグリジェの上半身を起こして

「ああ、大丈夫だよ、それより明後日、集団宿泊訓練だろ」
「一夫君は、宿泊訓練に行かないでほしいの」
「どうしてだ？」
「あなた、もうすぐアレがくるから」
里美は顔が真っ赤になりながら
「つまり、生理よ、あたしは慣れているからいいけど問題はあなたよ。明後日から始まるらしいからちょうど宿泊訓練日にあたるのよ。あなたがちゃんと処理できるか心配で」
「おれ、なんだか腰がだるい感じして、それかな？」
「それよ、生理という顔してたら男子達がからかうのよ。だから心配で…」
「心配するなよ」
「それがいけないのよ。あなた、ちゃんと処理できる？　この前、鏡台の下着入れに花柄ポーチがあったの覚えてる？　その中にナプキンが入ってるわ。使い方は紙に書いてあるから。生理が始まる前にナプキン付けてね。始まってからでは遅いわパンティ汚すから。それからパンティ汚れたらすぐ洗濯してね、ナプキンはこまめに替えてちょうだい。使い終わったらトイレの片隅の汚物入れに丸めて捨ててね」
「わかったて！」
ゴホン　ゴホンッ！
一夫はキツくてベッドの布団にもぐった。
「もう、心配だから言っての！」

集団宿泊訓練出発当日
職員室
プルプル　プルプル
「はい、南ヶ丘小学校ですが」
「6年2組の大場先生、いますか？　私、斎藤里美の母ですが」
「はい、おりますが」

「大場先生！　電話！」
「はい、はい」
「はい、代わりました大場と申しますが」
「大場先生、うちの娘里美は風邪が長引いて宿泊訓練休ませいただきます」
「わかりました。参加しても風邪をこじらせますのでお家でゆっくり休ませ下さい」
「これはご丁寧に、元気になったら学校に行かせますので有り難うございます」
六年生を乗せたバスは学校を出発した。

二日目の未明
里美の寝ている二段ベッドの下、他の男子達は爆睡している。
里美は目醒めてパジャマのズボンとブリーフが濡れている
（やだ、おしっこ漏らしたかも）
でも布団は濡れてない
（よかった、おねしょじゃなくて…）
里美は再び寝た。
朝
里美のパジャマが濡れているを同室の男子が見つけ
「一夫、パジャマ濡れてるぞ、まさか夢精じゃないの？」
クラス中の男子が言い触らして
「斎藤、夢精！　夢精、夢精」
囃し立てらたのだ。
あたしは真っ赤な顔で夢精で汚したブリーフを洗面所で洗った。
洗っているところを男子に見つかり
「斎藤君、夢精パンツ洗っての？」
悪ガキの佐々木が里美のブリーフを取り上げ
「もう、やめてよ！」
「いやだよ！」

夢精パンツを広げながら食堂へ
「返してほしいなら、ここまで追いで」
「もう！　返してよ！」
ワーワー　ワーワー
里美の夢精パンツは女子が食事しているテーブルに投げつけられ、
そのパンツが事もあろうか味噌汁茶碗に入ってしまったのた。
「きゃあああっつ！　ううっ　うわあああん～」
3組の小川千恵が泣き出してしまった。
ガヤガヤ　ガヤガヤ
「斎藤君！　何ていう事をしたの！　謝りなさいよ！」
「あたしじゃない！　佐々木君よ」
その時、佐々木は姿を眩ました。
「汚い下着を投げてイタズラにはほどがあるわ」
「グズン　ううっううっ」
「小川さん、大丈夫！」
「とにかく、謝りなさいよ！」
「そうよ　そうよ」
3組の女子達が里美を取り囲んだ。
（あたしじゃないの　あたしじゃない！　一夫君助けて）
3組の担任が来て
「おまえか？　斎藤というのは？」
「わたしじゃありません」
バシッ！
「言い訳するな！」
「ううっ　うわあああん～うわあああん」
大場先生が来て
「どうしたんですか？」
「大場先生～」
ピンチにたった里美は

第十話　ブリーフ事件

宿泊訓練での事件、そう、里美の「夢精パンツ」が事もあろうことに男子達のイタズラによって3組の女子「小川千恵」の味噌汁が入ったお椀に何とパンツが入ってのだ。小川千恵はショックのあまりに寝室の二段ベッドで寝込んでしまった。
女子達から責め立てられ窮地に追い込まれた里美は

青年の家の会議室
大場先生が里美に尋ねた
「ねえ、斎藤君何であんな事になったの？」
「グズン　ううっ　ううっ」
「斎藤君、泣いたってわからないわ」
「だって、あたし汚れた下着洗っていたら…　佐々木君が…」

「佐々木君！　何であんなイタズラしたの？」
「おれ、知らないよ！　一夫のヤツがウソ言ってに決まってる」
悪ガキ佐々木はあくまでも里美が嘘ついているとデマカセを言っている。
「斎藤君、とにかく3組の小川千恵さんの所に謝りに行きましょう」

3組の女子のベッドルーム
部屋のドアに「小川千恵　佐藤ゆかり　安藤彩　森山美幸」と張った紙を見て
「ここだわ！」
コンコン　コンコン！
「入っていいかしら？」
ガチャン
二段ベッドの下に頭から布団を被って寝ている小川千恵に

「小川さん、あたし2組の担任の大場先生だけど、さっきはごめんなさいね、斎藤君が謝りに来たの」
布団の中で千恵は
「もう、帰ってよ！　来ないで！　斎藤の顔なんか見たくないわ！
うわあああああん」
（仕方ないわ）
里美にとってあまりのショックだった。

宿泊訓練が終わり学校に戻ると
職員室
「大場先生、至急校長室へ」
「はい！　わかりました」
（校長室？　何だろう？）
校長室の前
コンコン　コンコン
「大場教諭！　入ります」
「入りたまえ」
「失礼します！」
「ああ、父兄の方が大場先生に用があって来ました、まあ、座りたまえ」
ソファーに座って
「私くしは、6年3組の小川千恵の母親でございます」
「私くしは、6年2組の担任教諭の大場恵子と申します」
「大場先生といいましたね、先日の宿泊訓練でお宅の担任の男子生徒がウチの娘に対し大変失礼な事をされて一週間も学校休んでいるですよ。宿泊訓練から帰るなり娘はショックのあまり部屋に閉じこもって、私くしがわけを訊くと2組の斎藤という男の子から味噌汁の入ったお椀に何と汚い下着を投げ入れたというではないですか」
「誠に申し訳ございません」
「これは、謝って済む問題でありませんよ、娘にキズを入れたので

すから。とにかく斎藤という男子生徒とその両親と一緒に娘に謝ってもらいたいと思いまして」
「わかりました。小川さんの都合のいい日時で謝りにお伺いします」

「宜しく、お願いしますよ。それでは失礼！」
校長先生が
「大場先生、何で報告しなかったのだ。これで済んでよかったが、教育委員会に知れたら大変な事になる処だよ」
「校長、申し訳ございませんでした」
「とにかく一緒に謝りに行きなさい。以後気を付けたまえ！」
「はい、失礼します！」

小川家
里美とその両親、大場先生が千恵とその両親に菓子折りを持って謝りに伺っている。一夫の父が土下座して謝っていた。それをみて、千恵は明日から学校に行く事で母親もこの件関し許して貰った。

一夫の家
父が怒り心頭で
「バカ野郎！　一夫！　いいかお前、俺は弱い者いじめをしていいと教育した覚えはないぞ！」
里美の親父の鉄拳を何発も食らった。
里美はあまりのショックが大きく部屋に引きこもってしまった。
一晩中泣き明かし
「グズン　ううっ　ううっ」
（何であたしがこんな目に合わなきゃならないのよ、一夫のバカのせいよ、元の女の子に戻りたいよ、ママやお姉ちゃんの所に帰りたいよ　ううっ）

第十一話　証人

五月下旬の日曜日
風邪がすっかり治った一夫は里美（一夫の団地）の所へ遊びにいった。
「こんちわ！」
チューリップ柄のワンピースを着た一夫が
（誰もいねえのかよ）
そそくさと上がり込んだ、一夫の部屋を開けるとやつれた里美の姿にびっくりし
「一夫君！　会いたかったわグズン！」
「おいおい、どうしんだい？」
「あたしね、宿泊訓練で…」
里美の話を一部始終聞いた一夫は頭に血が上った。
「佐々木の野郎！　里美に罪を被せやがって卑怯な野郎だ！」
「一夫君、この前みたいに暴力はやめてよ」
「わかったてば、あいつを懲らしめないといかんな」
（万が一戻ったとき、おれも困るからな）
一夫は自分の部屋を見渡すと小綺麗になっていた。
ミニカーやヒーロー物のフィギュアがない、その代わり少女マンガが綺麗に並んでいるに気が付いた。
「ここにあったミニカーは？」
「それね、従兄弟の男の子にあげたの」
「おいおい、俺のものを勝手にすんなよ」
「だって、あたし男の子のものに興味ないもん」
「お前、男嫌いか？」
「だって、おしっこやお風呂の時、股の所に変な付いて蛇みたいにニョロニョロして気持ち悪いたっらありしないわ。あたし、病院で切ってもらいたいわ」

「バカ！　俺の体ぞ！　変な事考えるな」

「それなら、あたしの体も清潔にしてよね。毎日パンティ穿き替えての？」
「は穿き替えてよ」
「じゃ見せてよね」
里美はワンピースの裾を捲って花柄パンティを見たら
「まあ、紙で拭いての？　パンティ黄ばんでるじゃない。パンティライナーがあるわ薬屋にいきましょう」

里美は一夫の手を引いてドラッグストアへ
生理用品売場へ
（こんなところ恥ずかしいなあ）
パンティライナーを見つけ「あったわ」
薬屋を出て、一夫はライナーの入った袋を取り出そうとしたら
「バカ！　出さないで」
真っ赤になった顔で怒り出した。
「いい、使い方はナプキンと同じよ。これをしとけば下着を汚さないでいいのよ」

学校
クラスの女子が
「ねえ、斎藤さんトイレへ来て」
「何よ？」
一夫は女子と一緒に女子トイレへ
個室の中で
「斎藤さん、ここだけ話よ。言うわ、あのね実は宿泊訓練の事件、斎藤一夫君じゃないのよ佐々木がやったのあたし見たのよ、佐々木が下着を投げたのを」
「あなた、なぜその時言わなかったんだ」

「だって、言いだせなくて」
「今から、遅くない！　俺と一緒に大場先生に言おうよ」
（よかったな、里美！　証人が出てきてお前の汚名も晴らせるな）
「わかったわ」
「ありがとう！」

職員室
「何、斎藤君じゃないの！　佐々木君が、東さん詳しく話して」
「東さん、ありがとう！　斎藤君の汚名も晴らせるわ」

教室
「佐々木君、出て来なさい」
「はい！」
「正直に言いなさい。宿泊訓練の時、斎藤君の下着を3組の小川さんに投げたのあなたでしょ？」
佐々木は担任から目を反らした。
（こいつ、うそついてるな）
「ボク、違うよ一夫のヤツが」
「それでも白を切るのね」
「いいわ、東さん証言して」
「あたし、斎藤君じゃないの佐々木君がしたの見たわ」
エエ〜　ザワザワ　ザワザワ「一夫じゃないのか」
「斎藤君に酷い事言ったわ」
「さあ、佐々木君！　観念しなさい！　本当の事、言いなさい！」
佐々木は観念したのか、涙声で
「ごごごめんなさい〜！　本当はボクがしました。斎藤君がパンツを汚したの見てついからかって、そしたらボクが友達にパスつもりが誤って小川さんの汁椀に、ボク、怖くて…　ごめんな斎藤！　うううっうわあああん」
「よし、泣かないの正直に話してありがとう。その事は小川さんに

話しておくわ。後で小川さん謝ること」
「一夫！　ごめんな。てっきりお前と思ってた」
「あたしからも謝るわ」

一夫の家
ピンポン　ピンポン！
「はい！　どなた？」
「私くし、同じクラスの佐々木の父親です。斎藤一夫君に謝りたいと思いまして」
「どうぞ！」
ガチャ！
「夜分にすいません。私くし、佐々木の父親と申します。うちの息子がとんでもない事を。一夫君ですね、息子に代わって謝るからうちの息子の事を許してほしい。本人も反省しているからいつもの通り遊んでやってくれ。この通り」
土下座して里美の前で謝った。
「佐々木さん、そんな事しなくても」

テーブルの上にケーキやジュースにご馳走が
「一夫、この前殴って済まなかったな。お父さんこの通り謝るから。お前はこんな事する息子ではないと信じていた」
「ああ、いやボクがしっかりしていなかったら悪かったんだ。強くなるよ」
「あっ、そうかワハハハ！」
「お父さん、ビール」

里美の部屋のベッドの上で寝転がっている一夫
「ヤレヤレ、一件落着だな」

第十二話　プール

六月　雨がしとしとジメジメの梅雨の真っ只中の日曜日、里美は傘を差して里美ん家に遊びに行った。
ザアーザアー　ポツッ　ポツッ
雨がジャンジャン降る中、あたしん家についた。あたしは縁側からお邪魔した。（ここはあたしん家だよ。何遠慮してのよ）
と心の中で呟いた。
あたしは半袖のスポーツシャツに水色のサッカーパンツを穿いていた。
一夫が肩紐の白いワンピースを着て縁側のリビングに現れた。ワンピースから胸の谷間が見え隠れしている。
「いよ！　里美！　上がれよ！　俺残して、全員出掛けてるよ。家誰もいないから」
「一夫君、半袖のやつ着てよね！　胸がチラチラ見えるじゃない！」
「あっ！　コレ、お前のお袋に買って貰ったんだ。俺、気に入ってお袋にねだったらＯＫだったよ。蒸し暑くて丁度いいから」
「一夫君、せめてブラぐらい着けてよね」
「ハイハイ、わかりました、わかりました」
「何よ、その返事は」
「それより、俺の部屋に来いよ。幸いお袋もいないし」
あたしの部屋に入ると唖然とした。ベッドの布団はぐちゃぐちゃでパジャマは脱ぎ散らかしたままでマンガ雑誌とポテチの袋が床に散乱してた。
「もお！　あたしの部屋ぐらい綺麗にしてよね！」
「あっ、里美！　来月プールの授業が始まるから、お袋にさっきのワンピースと一緒に水着買ってもらちゃた、ほらっ！」
水色のヒラヒラスカートの水着を里美に見せた」
「あっ、可愛いじゃん！」

「お前の去年のスクール水着が小さくて、お袋が水着を買いましょと言って、スクール水着とヒラヒラ水着二つ買って貰ったんだ」
「お前も俺の海水パンツ穿いてみろよ。小さかったら俺のお袋にねだって貰え」
「あたし、海水パンツなんて…　恥ずかしいわ」
「お前、男の子なんだから女の子の水着というわけいかないもんな、なんなら、俺、海水パンツ穿こうか！」
「一夫のバカ！　エッチ！　もし、学校のプールで穿いたらあんたと絶交よ！」

一夫の家
「一夫！　いるの？」
「はあい！」
「いたの、来月からプールでしょ。去年の海水パンツ穿いてみなさい」
あたしは去年穿いていた一夫君の水着を穿いてみた。一夫君の部屋でブリーフ一枚になり、ブリーフを脱ぎ海水パンツを穿いた。
あたしは顔が真っ赤になるほど恥ずかしくて、股の所がモッコリしていた。

七月中旬　長かった梅雨が明け、まぶしい太陽がギラギラ照りつけた。校庭のセミもうるさく鳴き、夏到来を告げた。
うちの学校も待望のプール開きだ。あたしは一夫君の海水パンツを持っていった。
「はい、待望のプール開きで水着に着替えプールサイドに整列」
あたしは男子更衣室で海水パンツに着替えた。
男子達は素っ裸になりふざけあいをしてた。あたしが着替えて前で素っ裸の男子が走り抜けていった。思わず
「きゃあっ！」
と顔を背けた。

上半身裸で海水パンツ姿のあたしは情けなかった。両腕で胸を隠しながら背中を丸めて歩くなんて嫌だった。去年まで向こうの学校でスクール水着を着ていたあたしが男の子の海水パンツを穿くなんて……

第十三話　肝だめし

ミーン　ミーン　ジィイイ
暑い夏の盛り、やっと一学期も終わり、明日から夏休み。学校が終わり一夫と里美が一緒に帰ろうとしている。
「お前、通信簿見せてみろよ」
里美が
「いやだよ！　べェー」
舌を出した。一夫が無理矢理、里美の通信簿を取り上げたら
「いやだ、返してよ！」
「わっ！　すげえ体育以外４と５ばかり…」
「そういうあなたも、見せてよね」
「何、言ってるだよ」
里美は一夫の通信簿を取り上げた。
「あたしの見たのだから、あなたのも見せて、あっ！　何これ体育以外１と２ばかりじゃないの。帰ったらママに油絞られるわよ覚悟しなさいね」
一夫は足どりが重くなった。
８月に入り、南ヶ丘小学校のエリアでは、「納涼夏祭り」が行われる。一夫は朝顔模様の可愛い紺の浴衣を着てクラスの女子数人と一緒に会場に現れた。あたしは半袖のＴシャツにハーフパンツで。
「おっす！　里美！」
浴衣姿にがに股で歩いあたしに寄ってきたので。
「一夫のばか！　何よ浴衣で股広げて歩くなんて、女の子らしくしてよね。浴衣が台無しじゃない！」
里美がプリプリ怒っていた。
「そう、怒るなって」
クラスの男子達は

「おい、一夫のヤツ女みたいヨナヨナしているな」
「俺も、一学期が始まる時からおかしいと思ってたよ」
「よし、肝試しで一夫のヤツを脅かしてやれ！」
「俺の知り合いの中学生のあんちゃんに一夫が来たら抱き付くように頼んだ」
「そりゃ、おもしれや！」

「それでは、男の子の諸君、恒例の肝試し大会を行います。コースは簡単、市立霊園を一周するだけです」
（あたし、行かないわ。女の子ですもの）
「里美！　お前出るんだろ」
「ううん」
（一夫のヤツ…）
「一夫君！　お前ももちろん肝試し出るんだろ、でなゃ男じゃないよな」
「わかったわ、出るわ」

里美の番になった。
（怖いわ！）
周りは真っ暗で霊園の敷地は墓石ばかり立っている。
（やだ、お化けが出そうだわ～）
墓石に隠れてるクラスの悪ガキ達とゴリラのマスクをした中学生が里美が来るのを待っている。
（一夫のヤツまだかな）
しばらくして、内股でオドオドしたTシャツ姿の里美が来た。
（よし、来たぞ）
里美が近づいて来た瞬間、ゴリラのマスクをした中学生が
「ワアアッ～！！」
と抱き付いておどかした。里美がびっくりして
「キャアアアッ～！」

里美は腰を抜かして気を失ってしまった。
「おい、やばいぞ一夫のヤツ気を失ったぞ」
「しょうがない、俺がおぶってやるか」
ゴリラのマスクを外した中学生は気を失った里美をおんぶした。
（背中がつめたいぞ、ションベン臭いな）
なんと、里美のハーフパンツの前が小便でぐっしょり濡れていたのだ。
里美はびっくりしたショックで失禁してしまった。

第十四話　あたしのボーイフレンド

8月の中旬、里美の家
一夫は里美のベッドでゴロゴロしている
里美の母が部屋に入って来た
「里美、またゴロゴロして、宿題したの？　ところであなたの誕生日に前の学校のボーイフレンドの一朗君が遊びにくるわ」
「オオレの誕生日！？」
「あなた、忘れたの？　今月の十三日でしょ。いやだわ」
「一朗って誰だよ？」
「前の学校の同じクラスの男の子でしょ。家に来て遊びに来た子よ。まあ、女の子みたいにヨナヨナした斎藤一夫君よりいいわ」
（おれの知らない里美のボーイフレンドか）

あたしは一朗君が一夫君に所に遊びに来る事を聞きつけた。
「あたしのボーイフレンド一朗君が来るわ」
「そんな事知ってよ、お袋から聞いたから。近くの公園でデートだからよ、なんか男同士で変な感じだな」
「一夫君、女の子らしくしてちょうだい。間違っても男言葉使っちゃだめよ」
「わかったよ」

デート当日
一夫は長い髪を三つ編みにしてもらい。ピンクの清楚なワンピースに身を包み、肩からバックを掛けて、相当御めかして里美の家を出た。あたしは駅まで一緒に歩いた。
「里美、一朗ってどんなヤツだ」
「背が高くて、イケメンで頭がいいわ」
「ふんっ～　そんなにいい男かい？」

「いいわよ、クラスでモテモテですもの」
駅に着いて、自動改札機から一朗が抜けて来た。
「里美ちゃん！　久しぶり！」
「ここんちにわ！　あんた誰だよ？」
里美は一夫の尻をつねった。
「痛っててて」
「こんにちは一朗　一朗君！」
「あっ、こんにちは！　隣の男の子誰？」
「あっ、この人斎藤里美…」また、つねって
「痛っう、斎藤一夫君っていうの」
「ふん、同じ学校の男の子か」
「斎藤君、里美ちゃんとデートだから、よそへ行ってくれないか」
「里美ちゃん、どこへ行く？」
「公園がいいよ」
あたしは二人の後をついて公園へ、木の陰に隠れて、二人の様子を…
「里美ちゃん、南ヶ丘小学校に転校してどう？」
「おれ、いやあたし、クラスメイトがやさしくしてるから気に入ってのの」
「よかった。おれ来年有名私立中学を受験するんだ」
「ねねえ、どこよ」
「海城中学、ここは海城高校に直結して東大や早稲田などの一流大学への進学校でも有名なんだ。でも男子校だけどね」
（海城中学！？　おれの頭じゃとても…）
「その学校、難しいじゃないの？」
（難しいどころじゃないよ）「難しいよ、おれ進学塾に通ってる。でもこの塾でも一人か二人しか通らないし、かといって公立中学校行ってもバカばかりで…」
（こいつ…）
「里美ちゃんも私立中学に行くのかな？　どうせ、南ヶ丘中学に行

ってもなあ」
（この野郎、バカにしてんのかよ）
「行かないわよ、おれには素晴らしい南ヶ丘小学校の仲間と一緒に中学校に行くわよ」
「アッハハハ、里美ちゃんもバカだな、公立中学校はなあ、ゆとり教育の弊害でな先生もバカなんだよ。公立中学校で有名高校行こうとして苦労するんだよ。だいだい南ヶ丘小学校の先生もバカなんだよ、有名私立中学に行かせられないほど教え方が悪いだよ」
「おい、てめえ！　黙って聞いてればいい気になりやがってよ。南ヶ丘小学校のさんざんバカにしやがって、南ヶ丘小学校にいい先生がいっぱいいるんだよ」
一夫は一朗を殴ろうとすると、里美が出てきて。
「やめて、一夫君いや里美さん、南ヶ丘小学校をバカにするなら帰ってよ」
「里美はこんなおかまが好きなんだ。わかったよ、おかまと付き合えよ！　バイバイ」
「うっうううう　うわあああんうわあああん」
「里美、ごめんよ！　デート打ち壊して」
「ぐずん、いいのよあんな人。前の学校から嫌いだったのよ。頭の悪い人を見下すのよ。よかったわ！　あなたのおかげよ」
「里美、思い切り泣いていいよ」
「うわあああん　うわあああん」

第十五話　学校に行きたくないわ

里美の部屋
一夫がアルバムから里美のボーイフレンドの一朗の写真をビリビリ破いている。運動会の時、一緒に写っている写真まで

一夫の部屋
一朗にふられたせいか布団の中で
「ぐずん　うっうううう　うっうううう」
と泣き続けている里美

夏休みも終わり学校が始まった二学期の始業式
「おす！　里美！」
水色のノースリーブのワンピースに赤いランドセルを背負った一夫が
「夏休みのデート、ごめんな」
「あたし、もういいのよ。あんな人なんか」
教室
「はい、今日から二学期が始まります。もう夏休みボケは一掃し、勉強やスポーツに頑張って下さい。夏休みの宿題、後ろから集めて！」

男子便所
里美がオドオドして入る
朝顔には数人の男子が用を足している。里美は相変わらず顔を背けて
（きゃあっ！）
顔を真っ赤にして個室に入る。里美はまだ立ちションベンが出来ない。
（あたし、立ってなんか出来ないわ）
紙でホースの先を拭きながら思った。

それを見た、クラスの男子達が
「一夫のヤツ、ウンのところでションベンしてるぞ」
「最近、一夫おかしくないか？」
「俺もそう思ったんだよ、一夫のヤツがオカマぽっくなったのは」
「まさか、一夫のヤツ、チンポコなくしまっちゃなかろうな」
「まさか…」
「よし、一夫のヤツ、チンポコがあるかどうか確かめようぜ」
「どうやってだよ？」
「耳貸せ！」
ゴニョゴニョ　ゴニョゴニョ

下校時間
「バイバイ、里美！」
「さようなら、一夫君」
一夫と別れて一人で帰る里美に数人の男子に取り囲まれしまった
「きゃあっ！　何よ？」
「一夫君、急に女ぽっくなってどうしたの？」
「きゃあっ！　来ないであっち行ってよ」
逃げようとする里美を数人の男子達が進路を塞がれている。
「一夫君、なぜ逃げるのかな」
「もう、いやだこっち来ないで」
里美を捕まえ
「きゃあっ！　いやだ放して　放して」
男子達が里美を木の陰に連れ込み、押し倒してズボン脱がせようする。
「きゃあっ　きゃあっ！　何するのよう！！　やめてよ　やめて」
里美はバタバタして抵抗するが。両腕を押さえられ、ついにブリーフまで脱がされ、チンポコがみえた。
「なんだ、一夫のヤツ、チンポコあるじゃん」
「おもろくしないぜ」

「帰ろうぜ」
男子達がその場から立ち去ると
「うっうううう　うわあああん　うわあああああん～」
泣き叫んだ
「うっうううう　ぐずん　うっうううう」
泣きながらズボンを穿いて家へ帰った。
「一夫、ご飯よ」
「あたし、いらないわ」
「一夫、具合でも悪いの？」
布団を敷いて、布団をかぶって
「ぐずん　うっうううう　うっうううう」
（あたし、学校に行きたくない、行きたくないわ、何であたしがこんな目に…）

第十六話　転校！？

１０月初旬　６年２組の教室
担任の大場先生が出欠を取っている。
「斎藤一夫君」
「…」
「斎藤一夫君！　いたら返事しなさい。斎藤一夫！」
女子生徒が
「斎藤君は、具合が悪いから休ませると斎藤君のお母さんから連絡がありました」
「あっ、そう！　後で電話するわ。ありがとう」

その５日後も
「斎藤一夫君！」
「…」
「斎藤君、また休みだわ！　誰か斎藤君の事、知っている人？」
シーン
（里美のヤツ、どうしちゃんただろ？）
男子達数人がヒソヒソ話
「おい、一夫のヤツ、ずっと休んで心配だよ」
「まさか、俺達よ一夫がカイボウされたショックでよう…」
「ばか、心配するなって！」
大場先生が男子達のヒソヒソ話に
「こら！　その男子、私語をするな！」

昼休みの教室
一夫が机でマンガを読んでいると、田中という男子が来て
「一夫の事が気になるのか？やめておけよ、あんなヤツ」
「どうして？」

「だってよ、一夫のやつオカマみたいでヘナヘナしているんだぜ。夏祭りの肝試し時、中学生のお兄さんに脅かされてションベン漏らしたんだぜ」
「ふーん」
「もう一つな、一夫のヤツ、立ちションベンが出来ないんだぜ！男のくせによ。ウンの所でしゃがんでするんだぜ笑わせるぜ！　こいつにチンポコがついてるかどうか確かめにカイボウっいうわけ、きゃあきゃあ泣き喚ちまってよ、全く！」
一夫は頭に血が上り
「てめえ、田中っていうヤツは」
田中のズボンとパンツをずり下げフルチンになった。
「きゃあっ！」
女子生徒達が顔を背け
「田中！　てめえのやっている事がわかねえのか？」
田中のケツに何回も蹴りを入れ
「痛いよ、ごめんなさい」
「斎藤さん、やめて！」
田中がズボンとパンツを穿きながら
「ふんだ、斎藤の男おんな、一夫のチンポコでも貰っとけ！」
捨て台詞を吐き逃げた。
パチパチ　パチパチ
女子生徒達の拍手が沸き
「斎藤さん、強いのね。せいせいしたわ」
「田中ってというヤツ、いやだったわ！　スケベで変態で」

一夫の家
里美は自分の部屋に閉じこもっていた。一夫がやってきた。
「里美、5日も学校休んで心配だったんだぞ！　給食のパン持ってきた食えよ」
「一夫くーん！　ああーあん　あたし、あたし、学校が怖くて」

「ああ、あの事かよ」
「一夫君、知っての？」
「田中のバカがわざわざ俺に話したから、頭に来て…」
「一夫君ったらもう！」
「もう、心配するな！　俺がついているからな。明日から学校来いよ」
「…」
「心配するなって、先生もクラスのみんな心配してるぞ」

夕飯の時間
「一夫、お父さんから大事な話があるから」
「我が家は、お父さんの仕事の都合で１２月には九州に転勤することになる」
（えっ！　あたし、転校するの？）
「詳しい事は、後で話す事になる。一夫！　そのつもりでおれ、わかったな」
「はい」
（うそっ、あたし、また引っ越すの）
「お父さん、栄転おめでとう！」
ビールを注ぎながら
「うむっ！」
また転校する事になった里美は、元の女の子に戻れのか、男の子まで転校するのか

第十七話　運動会

「ええ！　俺んち引っ越すのか？」
一夫は驚いてベッドから起き上がった。
里美の部屋にいる里美は
「いやだわ、またあたし、転校するだわ～」
「参ったな、親父また、転勤かよ、いつ引っ越すだよ」
「来月、九州に」
「そうか、俺達、元に戻らなければ…」
「いやだわ！　あたし、斎藤一夫のままでいるんだわ、うっうううう」
「来月まで、元に戻らないとなあ」
「あんた、斎藤里美っていう女の子好き？」
「まあな、最初は女の子って面倒臭いなあと思ってた。清潔にしなきゃならないし、髪はブラッシングしてパンツは穿き替えなきゃいかんし、まして月に一度のアレなんか…　でも、女の子っていいもんだと思った」
「あなた、立派なお嫁さんになってね」
「というお前は？」
「あたし、男っていやだったわ、胸出して裸なんて、まして トイレやお風呂の時、股に変なモノがついて気持ち悪かったわ、でもね覚悟決めたの斎藤一夫で生きてみるのもいいじゃん」
「マジかよ」
「あたし、小さい頃男の子に生まれたらなあと思ったのよ、男の子に生まれ変わってのよ。ウフフ！　あたし、立ってオシッコの練習しなきゃ…」
「お前、本当は戻りたいだろう？」
「ねえ、お願いがあるけど、あたしの体見せて」
「何でだ？」
「あたしの体にサヨナラ言わせて」

一夫のブラウスのスナップを外し、ブラジャーを着けた胸が現れになり、ブラジャーのフロントホックを外すと未熟なおっぱいを擦りながら
「サヨナラ、あたしの体！　あたしのおっぱい…」
里美は一夫のスカートに手を入れパンツを脱がそうとすると
「お！　おい！　里美！　ちょっと待て！　そこはなあ…」
一夫は顔を赤らめて
「サヨナラ　あたし！　うっううう　うわあああんうわあああん」
泣きじゃくりながら部屋を飛び出して行った。

１０月下旬　南ヶ丘小学校は運動会に向けて練習に励んでいる。一夫はクラス対抗女子リレーの選手に選ばれた。練習の時、大場先生から
「斎藤さん、その調子！」
ブルマ姿で校庭のトラックを疾走する一夫。

運動会当日の日曜
一夫の家
朝から弁当を作っているお袋
里美は朝起きて、白の校章の入ったランニングシャツを着て白い短パンを穿いて家を出た。

里美の部屋
ピッピッ　ピッピッ　ピッピッ！
一夫はベッドの中で爆睡していた。
「ううん　うっうう！」
目覚まし時計が鳴り、眠けまなこで起きた。
パジャマを脱いで上半身裸でそのまま白のエンジカラーの半袖丸首シャツを着ようとしたら
コンコン　コンコン！

「あたしよ、里美　里美」
ランニングシャツ姿の里美が窓の外にいた。
窓を開け、里美が中に入ると
「もう、そのまま体操服着て、ブラジャー着けよ」
「ごめん　ごめん！」
下着入れの引き出しからブラジャーを出してブラを着け半袖シャツを着た。
「パンツ穿き替えたの？　ブルマも新しいのを穿いてちょうだい」
里美は下着入れから替えのブルマを出して一夫に渡した。
「あっ、ママが来る頃だわ、あたし、外で待ってわ」
一夫はブルマを穿きながら
「うん、待ってろな」
「ハミパンしないでよ」

「あっ、里美！　待ってた？」
半袖シャツにブルマ姿の一夫が来た。里美が股の所を見て
「一夫君、ハミパンしないでよ！　ブルマの裾からパンティはみ出てるじゃないの」
ブルマの裾から白いパンティが顔を出している。あわててパンティをブルマの裾に入れた。
「里美！　背中伸ばして歩けよ。男だから胸を張って」
背中を丸め恥ずかしそうに歩く里美

バァン　バァン
運動会の開会を告げる花火が上がり、一年生から六年生まで男女別に入場する。最初は児童会役員が日の丸を広げ行進、そのあと白いランニングシャツと短パンの男子が入場行進、六年生男子の後に白のエンジクルーネックの半袖シャツと紺色のブルマの女子が入場、トラックを一周した後、フィルドに整列する。
「国旗掲揚！　生徒、先生は掲揚ポールに注目！」

「国歌斉唱します。テントにいる父兄の皆様と来賓の方はご起立をお願いします」
児童会会長が国旗を括り付け
「国歌斉唱！　国旗に注目して下さい」
君が代が流れる中、国旗が揚がっていく。ポールの天辺につくと
「なおれ！　父兄の皆様と来賓の方はご着席下さい」
校長先生の長い話が終わり
競技開始、午前中の部が終わり弁当の時間
大場先生がやってきて
「斎藤さん、食べ過ぎないようにリレーの選手なんだから」
一夫がおにぎりを頬張っていた。

午後の競技
一夫の出番が来た
「六年生女子リレーに出場する選手は入場門へ
入場門
「さあ、頑張って！」
円陣を組み
「2組！　ファイト　オー！」
黄色い声がこだまし気合いを入れた。
「六年生女子リレー！　選手入場します」
ワァーア　ワァーア
フィルドに集まり、大場先生が
「落ち着いて、練習したことを思い出して、アンカーの斎藤さん、気合い入れて」
くじ引きでインアウトを決める。2組は真ん中のコーススタート
「位置について、ヨウーイスタート！！」
パアン
一斉にダッシュした。
ワァーア　ワァーア

「頑張れ！　頑張れ！」
6年2組は真ん中だった。番はアンカーに来た。
「斎藤さん、頑張って」
一夫がリレーゾーンに入ると佐藤美紀がバトンを差し出してくる。
バトンを受け取ると一夫は猛ダッシュした。
「斎藤！　イケイケ！　頑張れ」
「斎藤さん！　頑張ってえ」
スピードを上げ、1組と3組、5組をごぼう抜きした。
ワァーア　ワァーア
「いいぞ　いいぞ　斎藤」
大場先生が身を乗り出して
「斎藤さん！　その調子」
第三コーナーからトップの6組を捉え、一夫と陸上部の中村とデットヒートになった。第四コーナーから一夫は猛チャージ
「イケイケ　イケイケ！」
ゴールテープを切ったのはおっぱいが先にかかった一夫がゴールした。
「一着2組　二着6組…」
「やったぞ！　優勝だ」
応援席にいた里美は
（よかったわ　一夫君）
ハアー　ハアー　ハアー
「斎藤さん、頑張った」
女子リレーの選手達が一夫を取り囲み
「やったね、里美！」

大場先生がタオルを持ってきて
「おめでとう！　言うことないわ」
応援席に帰ると
ワァーア　ワァーア

一夫はクラスの英雄だった。

最終話　神社

一夫の活躍により六年生最後の女子リレーは優勝した。
表彰台には一夫の他2組の代表選手らが昇っている。「一位　6年2組　二位…」
校長先生から賞状と選手全員にメダルを授与された。首から金色のメダルをぶら下げた一夫
「よかったね、一夫君」
運動会のフィナーレの生徒全員と先生、保護者達のフォークダンスを踊った。
一夫と里美が手を取って嬉しそうに踊っている。

6年2組の教室
ガラッ！
機嫌よく大場先生が入ってきて
「はい、席に着きなさい！」
泥や汗まみれの体操服姿の生徒を見回して
「女子リレーの選手達、前へ！」
「一夫君って！」
里美が一夫の背中を押すと照れながら前へ出た。
半袖シャツとブルマ姿の女子5人が
パチパチ　パチパチ
拍手の嵐で迎えられ、前に出た。
「よく頑張りました。特にアンカーの斎藤里美さんの活躍で一位になれた事を2組の誇りに思います。斎藤さん、この調子で勉強も頑張るよう」
ゲラゲラ　ゲラゲラ
下校時間

１１月の夕暮れは早く、夕日が眩しいくらいだ。
半袖シャツ姿の一夫とランニングシャツ姿の里美がゆっくりと肩を並べ歩いている。
「運動会、終わっちまった」
「結局、あたし達元に戻れなかったね」
「里美、家片付いているか？」
「もう、半分くらいね、ママがあなたの部屋片付けなさいって」
「来月か、里美と別れるのは」
「うっうう　あたし　あたし、いやよ！」
「しょうがないだろ、このまんまだから」
「あたしのママに会いたい、会いたいわ！　あたしん家帰りたい」
「そんな事言われても…」
ついに二人が入れ替わった神社の社にいた。石段の所は夕日が眩しかった。
「俺達が六年生になって初めて俺とお前が入れ替わったんだ」
二人は石段に立った。ところが一夫の目に夕日が入り立ち眩みがした。一夫はふらつき里美に抱き付き、足を踏み外したのだ。里美が
「きゃあっ！」
叫んだ
二人とも石段を転げ落ちた
あたしはまた気を失った。しばらくして低い男の子の声で
「里美！　里美！　しっかりしろ　死ぬな！　死ぬなよ」
叫んでいたのが聞こえた。声で目が覚めたあたしは、白のエンジカラーのクールネックの半袖丸首シャツに紺色ブルマを穿いていた。
（入れ替わったんだわ、男の子の服に着替えなきゃ！　うん？　あたし　女の子だわ　女の子よ　元に戻ったんだわ！）
あまりの嬉しさ
「うっうう　うわあああん　うわあああん　あたし達戻ったのよ」
ランニングシャツ姿の一夫君も男の子に戻った。
「うん！」

あたしは股の所がスウスウし確かめた。
あたしは半袖シャツの胸を触ったら
（ある　あるわ　あたしのおっぱい）
「ある　あるわ！　一夫君は？」
「ない、ないよ」
あたしはブルマの中に手を入れ前を触ると
（ない、なくってるわ！）
「ない！　なくってる！」
あたしは一夫君と抱き付きグルグル頬擦りした。
「おれ、立ちションベンするから」
向こう向いてオシッコをした。一夫は嬉しそうだった。
（あたしもおしっこしたくなった）
顔を赤らめて
「あたし、おしっこしたくなっちゃった」
「おい、してこいよ」
「一夫君、紙ある？」
短パンのポケットに入ったティッシュを貰い、神社の女子便所に入って
トントン　トントン
ガチャン！
ブルマとパンティを下ろし便器に跨りしゃがんで、股の間の小さな穴から
チィー　チィー　ジョボジョボジョボ
おしっこが出た後、あたしは紙で股を拭いて、ブルマとパンティを穿いた。
女子便所から出てきて
「あたし、一夫君の事大好き？」
「俺も、里美の事大好き？」
「あたし、あたしん家帰る」
「俺も」

あたしはあたしん家へ石段を上がり、走って家へ帰りついた。
斎藤の表札の門をくぐり抜け
ガラガラ！
玄関を開け
「ただいま！」
「里美！　お帰り、遅かったじゃない」
「ママ、ただいま！　うっうう　うっうう　うわあああんうわあああん」
「里美、どうしたの？　泣いたりして」
「ママにあいたかったの　あいたかった」
「この子はどうしたでしょ？里美、着替えて風呂に入りなさい」
「はあい！」

夜　里美の部屋
一夫が今までいた寝てた部屋を綺麗にして女の子らしくなった。パジャマに着替えて久しぶりに自分のベッドにもぐり込んだ。

午前7時
ピッピッ　ピッピッ　ピッピッ
ベッドで爆睡している斎藤里美は目覚まし時計が鳴り響き
ガバッとベッドから起き上がった
ボサボサの長い髪にパジャマ姿で鏡台の鏡を見ると
「なんだ、夢か」
カレンダーは4月5日の始業式だった。
春休みが終わり、今日から学校だ。
「里美！　起きたの？　今日から学校でしょう！　着替えて朝ご飯食べなさい！」
「はあい！」
新しい小学六年生の始まりであった。

完

最終話　神社（後書き）

なんと、これは夢であったのだ。現実問題、男の子と女の子が入れ替わるなんてありえない事だ。
原作の「おれがあいつであいつがおれ」では男の子つまり一夫が女の子になった話、男の子の目線で女の子の生活を書いた。この物語は女の子里美が男の子になったのだ。今度は女の子の目線で男の子の生活を書いたのだ。男の子になった里美は女の子にないモノにビックリ、朝立ちや夢精を経験し、上半身裸になるなど赤面するばかりの里美、女の子になった一夫は異性の違いに戸惑う里美をサポートしながらお互い好きになる。最後が夢であったというオチをつけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4410o/

あたしがあいつであいつがあたし

2011年7月13日22時16分発行